

定期交換部品	3-1	ドライブチェーン	3-9
点検整備方式	3-2	電気装置	3-14
ステアリングシステム	3-4	潤滑装置	3-15
ブレーキ	3-4	燃料装置	3-16
ホイール	3-7	冷却装置	3-19
サスペンション	3-8	灯火装置	3-20
クラッチ	3-9	その他	3-21

## ▲注意

- ・排気ガスには一酸化炭素（CO）などの有害成分が含まれているため、閉めきった場所など通気の悪い所で長時間エンジンをかけないこと。
- ・エンジン停止直後は、マフラやエンジンが熱くなつてお肌が触れると火傷することがある。エンジン停止直後に整備を行う場合は、長袖の作業着や手袋を着用して作業すること。
- ・ガソリンは非常に引火しやすいため、作業場所に火気を近づけないこと。裸火だけでなく、電気のスパークにも十分注意すること。また、気化したガソリンは爆発の危険もあり、通気の良い場所で作業すること。
- ・駆動系統など回転部分や可動部分に、手や衣服などをはさまれないように注意すること。
- ・液量点検はリザーブタンク側で行う。ラジエータ側で行わないこと。エンジンが熱い時（100°C以上あると思われる時）にラジエータキャップを開けると冷却系統の圧力が低下し、急激に冷却液が沸騰することがある。冷却液の温度が下がつてからキャップを開けること。
- ・冷却液は毒性があるため飲用したり、皮膚、目や衣服に付着させないこと。  
—皮膚や衣服に付着した場合は、石鹼で洗い落とす。  
—目に入った場合は水で十分に洗い流し、専門医の診察を受ける。  
—飲んだ場合は直ちにおう吐させ、専門医の治療を受ける。
- ・冷却液は子供の届かない場所に保管する。

## ★注意

床面が水平で安定した場所に車両を置き、車両のスタンドまたはメンテナンススタンドで車体を確実に支えること。

## 定期交換部品

交換時期は、年または走行距離のどちらかが早く達した時に実施すること。

定期交換部品項目	交換時期	備考
油圧ブレーキ関連ゴム部品	4年毎交換	マスタシリンダカップ及びディスクキャリパーのゴム部品
ブレーキ液	2年毎交換	
エアクリーナエレメント	4万km走行毎交換	ビスカス式
エンジンオイル	初回1,000 kmまたは1か月 以後10,000 km走行毎交換	
オイルクリーナ	初回1,000 kmまたは1か月 以後20,000 km走行毎交換	
冷却水	4年毎交換	

# 点検、調整

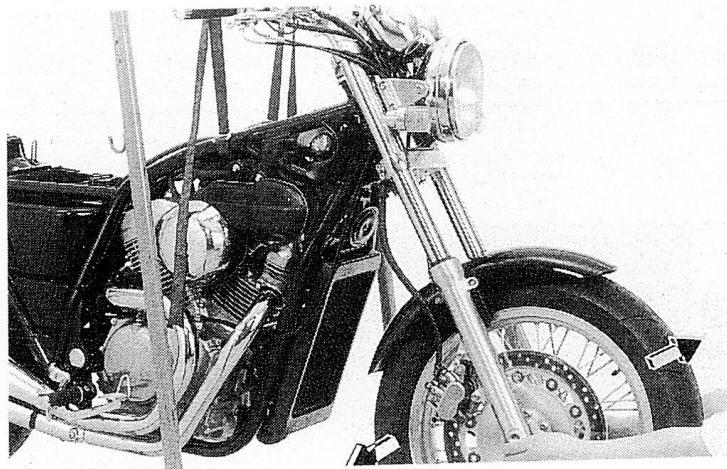
## 点検整備方式

●：法定項目、○：メーカ指定項目、■：該当しない項目を示す

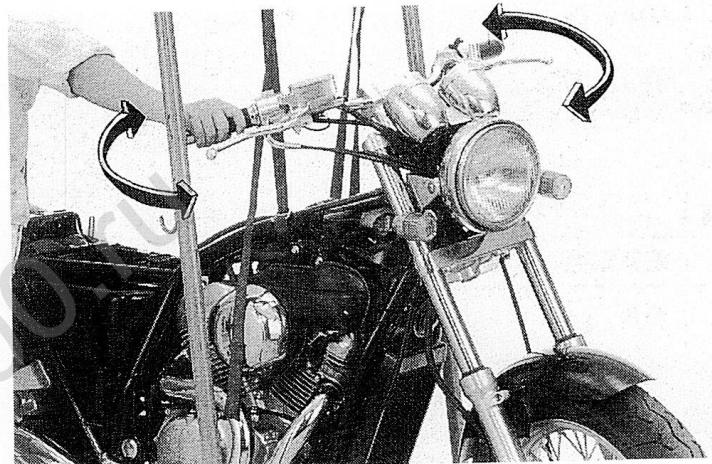
点 檢 整 備 項 目		点検整備時期			判 定 基 準
点 檢 箇 所	点 檢 項 目	日 常 点 檢	6 か 月 毎	12 か 月 毎	
かじ取り装置	ハンドル	操作具合		●	
		損傷		●	
制動装置	フロントフォーク	ステアリングシステムの取付状態		●	
		ステアリングシステム軸受け部のがた		●	
走行装置	ブレーキペダル及びブレーキレバー	遊び	●	●	レバー先端で10-20 mm ペダル先端で10-20 mm
		ブレーキのきき具合	●	●	
	ロッド及びケーブル類	緩み、がた及び損傷		●	
	ホース及びパイプ	漏れ、損傷及び取付状態	●	●	
	リザーバタンク	液量	●	●	前輪：下限レベル以上にあること 後輪：上限～下限間にであること
	マスターシリンダ及びディスクキャリパー	機能、摩耗及び損傷		●	
	ブレーキドラム及びブレーキシュー	ドラムとライニングのすき間	●	●	
		シューの摺動部及びライニングの摩耗		●	
		ドラムの摩耗及び損傷		●	
緩衝装置	ブレーキディスク及びパッド	ディスクとパッドのすき間		●	
		パッドの摩耗	○	●	摩耗限度溝以上残存していること
		ディスクの摩耗及び損傷		●	前輪：標準厚さ 6.0 mm、使用限度5.0 mm 後輪：標準厚さ 5.0 mm、使用限度4.0 mm
	ホイール	タイヤの空気圧	●	●	前輪 200 kPa (2.00 kg/cm <sup>2</sup> ) 後輪 225 kPa (2.25 kg/cm <sup>2</sup> ) 1名乗車時： 前輪 200 kPa (2.00 kg/cm <sup>2</sup> ) 後輪 225 kPa (2.25 kg/cm <sup>2</sup> )
		タイヤの亀裂及び損傷	●	●	
		タイヤの溝の深さ及び異常な摩耗	●	●	トレッドにウエアインジケータが現れていないこと
		ホイールナット及びホイールボルトの緩み	●	●	
動力伝達装置	クランチ	クランチレバーの遊び	●	●	レバー先端で10-20 mm
		作用	●	●	
	トランスマッショニ	油漏れ及び油量	●	●	

## ステアリングシステム

車体を確実に支え、フロントホイールを浮かせる。  
フォークの下端を持って前後方向に動かし、ガタがないか点検する。ガタがある場合は、ステアリングシステムナットの増し締め、またはシステムの分解整備を行う。（⇒12-23）



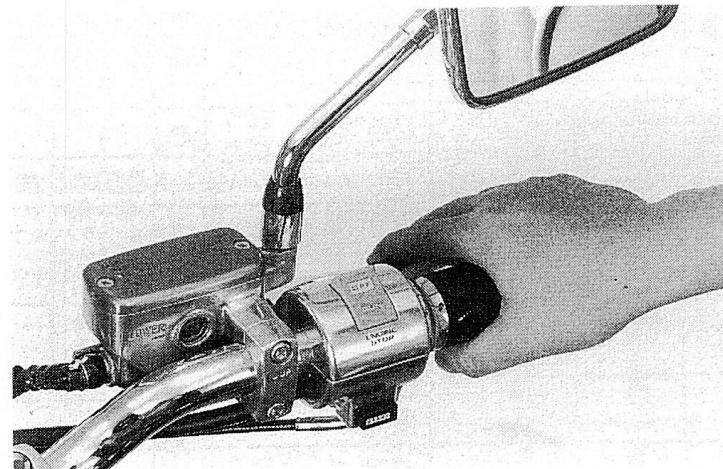
車体を確実に支え、フロントホイールを浮かせた状態でハンドルを左右に転舵した時、滑らかに動くことを確認する。  
引っ掛かりや操作の重い箇所のある場合、ケーブルやワイヤーハーネスが干渉していないか確認し、異常がなければステアリングシステムを分解してシステムレースに摩耗、損傷がないか点検する。（⇒12-23）



## ブレーキ

### ブレーキの遊び

ブレーキレバー、ブレーキペダルを強く操作し、油圧ブレーキ系統に空気が混入していないか確認する。  
レバー、ペダルを操作した時に柔らかく感じる場合、エア抜きを行う（⇒14-4）

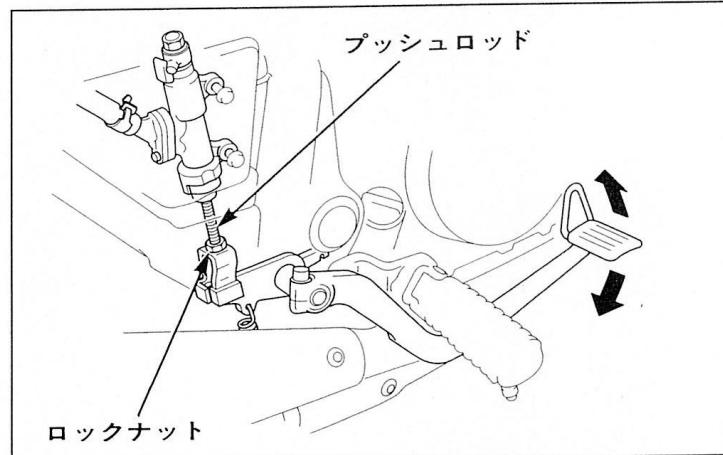


### ブレーキペダル高さの調整

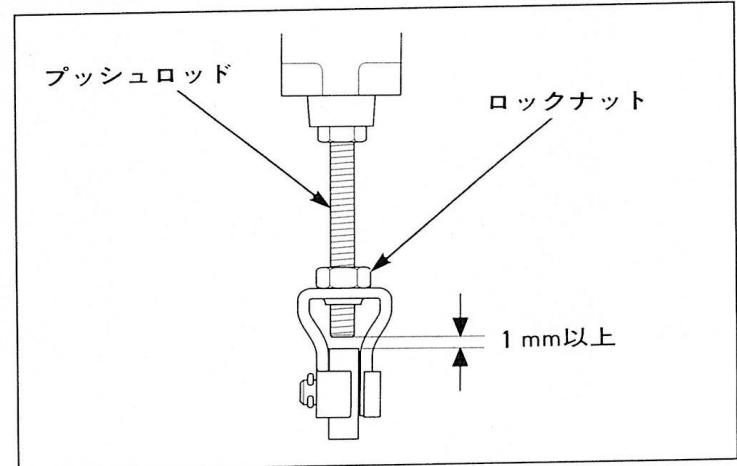
リヤブレーキペダルの高さの調整はロックナットをゆるめ、  
プッシュロッドを回して調整する。

#### \* 注意

ブレーキペダルの調整後にストップライトスイッチの点灯  
時期を確認し、調整する。（⇒3-20）



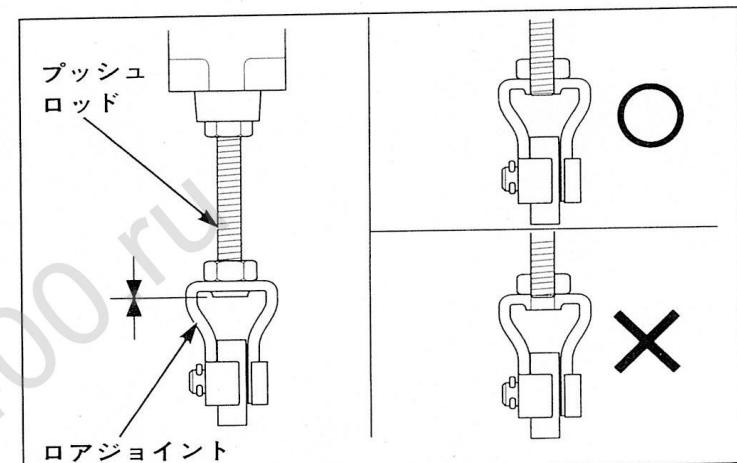
ペダルを下げる方向に調整する場合は、プッシュロッド下端部とペダルジョイント部のすき間が1mm以下にならないように調整する。



ペダルをあげる方向に調整する場合は、プッシュロッド下端部がロアジョイントのねじ部と同一面になる位置までの範囲内で調節する。

#### \*注意

プッシュロッド下端部がロアジョイントねじ部に入らないように注意する。



調整後、ロックナットを確実に締め付ける。

トルク：18 N·m (1.8 kgf-m)

ブレーキのきき具合、ブレーキライトスイッチの点灯時期を点検する。

## リザーバタンクの液量

### フロント：

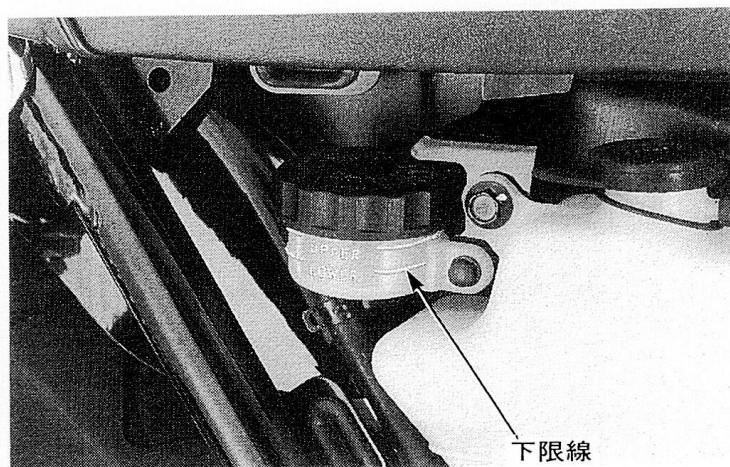
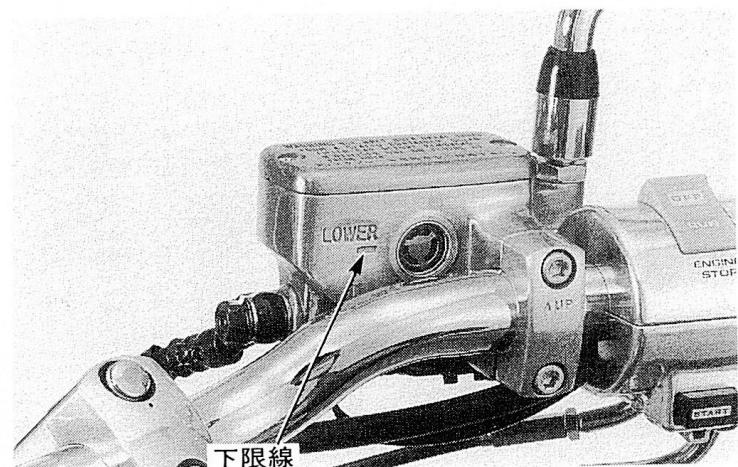
ハンドルを左に切ってリザーバを水平な状態にする。点検窓から覗いて、リザーバタンクの液量を点検する。

### リヤ：

R.サイドカバーを取り外す。 (⇒2-2)

車体を垂直な状態にしてリザーバタンクを水平にする。リザーバタンクの液量を点検する。

ブレーキ液面が下限線 (LOWER) 付近まで減少している場合、ブレーキパッドの摩耗を点検する。 (⇒3-6)  
パッドの摩耗が少なく、ブレーキ液量が下限線近くにある時は、油圧系統に漏れがないことを確認したうえで、リザーバタンクにブレーキ液を補充する。



# 点検、調整

フロント：

マスター缸を水平にした状態でスクリュ 2 本を外し、リザーバキャップ、セットプレート、ダイヤフラムを外す。  
リザーバタンクの上限線まで推奨ブレーキ液を補充する。

リヤ：

車体を垂直にし、リザーバキャップ、セットプレート、ダイヤフラムを外す。  
リザーバタンクの上限線まで推奨ブレーキ液を補充する。

推奨ブレーキ液：ホンダウルトラブレーキフルードDOT4

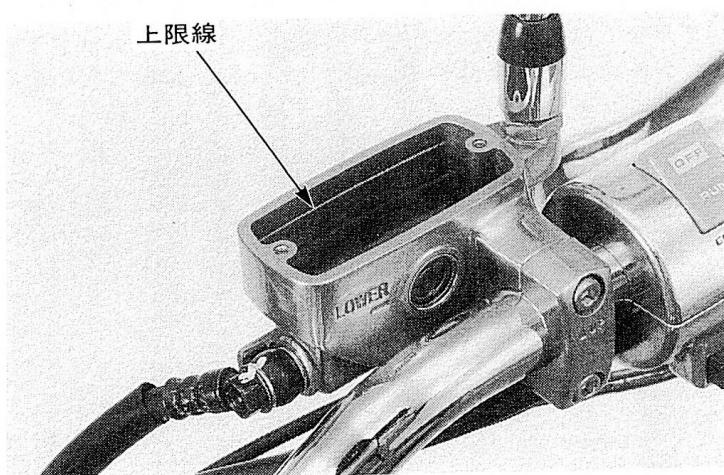
## ⚠ 注意

- ・ブレーキ液の補給時にゴミや水を混入させないこと。
- ・化学変化を防止するため、銘柄の異なるブレーキ液を混用しないこと。

## ⚠ 注意

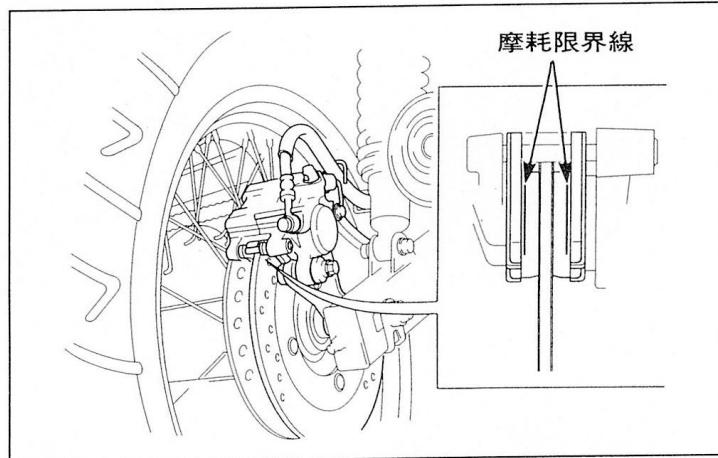
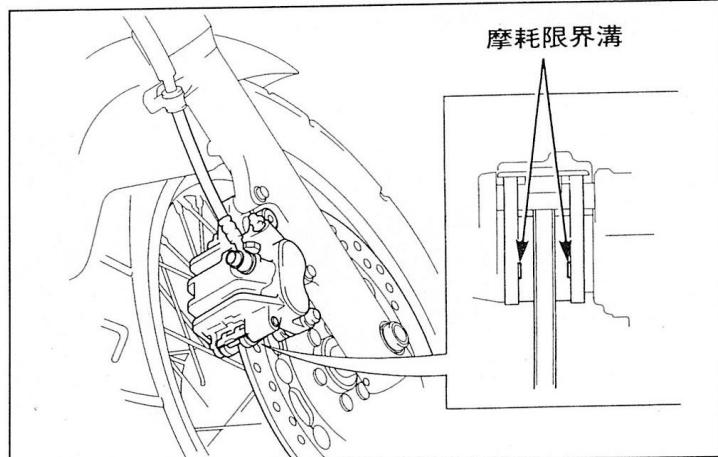
ブレーキ液は塗装、プラスチック、ゴム面を傷めるため部品に付着させないこと。

ブレーキ液の補充後、ダイヤフラム、セットプレート、リザーバキャップを取り付ける。



## ブレーキパッドの摩耗

キャリパの後方からブレーキパッドの摩耗状態を確認する。  
ブレーキパッドの摩耗限界溝または線までパッドが摩耗している場合は、パッドをセットで交換する。 (⇒15章)



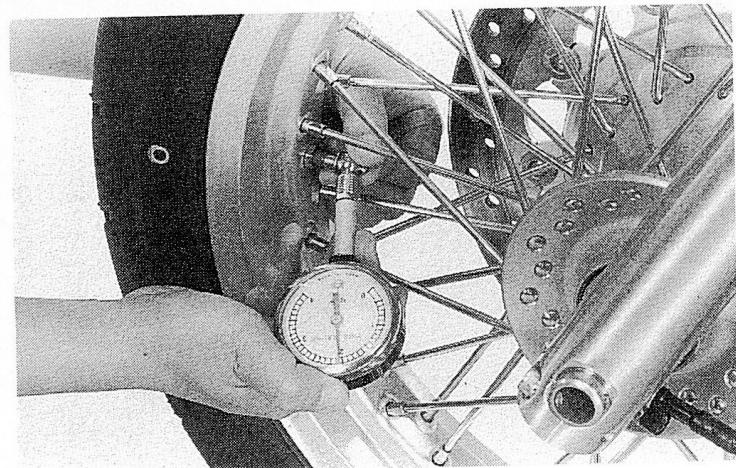
## ホイール

### タイヤの空気圧

タイヤゲージで各タイヤの空気圧を測定する。

#### ★注意

- ・タイヤ空気圧の点検は、タイヤが冷えている時に行う。
- ・タイヤ空気圧が不適正のまま使用すると、操縦性や乗り心地の悪化、タイヤの偏摩耗などの悪影響がある。



#### タイヤ指定

単位 : kPa (kgf/cm<sup>2</sup>)

		前輪	後輪
1名乗車	一般	200 (2.00)	225 (2.25)
	高速	200 (2.00)	225 (2.25)
2名乗車	一般	200 (2.00)	225 (2.25)
タイヤ 銘柄	ブリヂストン	G701	G702
	ダンロップ	K555F	K505
ホンダ推奨摩耗限度値		1.5 mm	2.0 mm

#### ▲注意

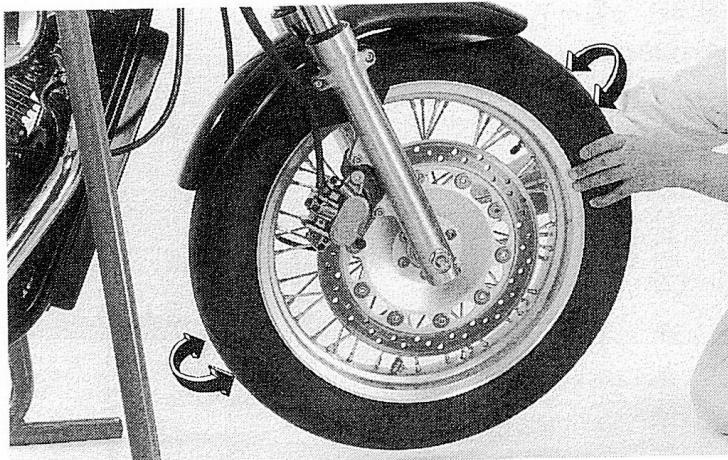
低すぎる空気圧で荷物を多く搭載したり、連続高速走行するとタイヤが過熱し、バースト（破裂）する恐れがある。

### ホイールベアリングのガタ

フロントホイールを浮かせる。

左右いずれかにハンドルを一杯に切った状態で、ホイールをアクスル方向に揺すってガタがないか点検する。

異常なガタがある場合は、フロントホイールを外してホイールベアリングの点検を行う。（⇒12-9）

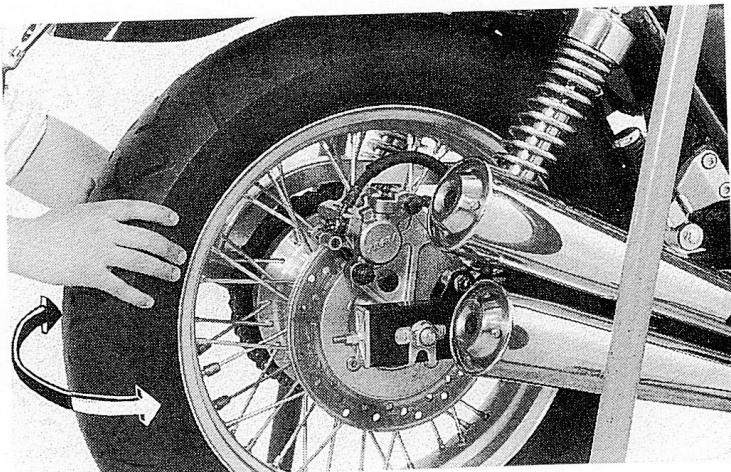


リヤホイールを浮かせ、ホイールをアクスル方向に揺すってガタがないか点検する。

異常なガタがある場合は、リヤホイールを外してホイールベアリングの点検を行う。（⇒13-4）

#### ★注意

スイングアームピボットのガタも含まれるためホイールベアリングのガタかスイングアームのガタか確認する。



# 点検、調整

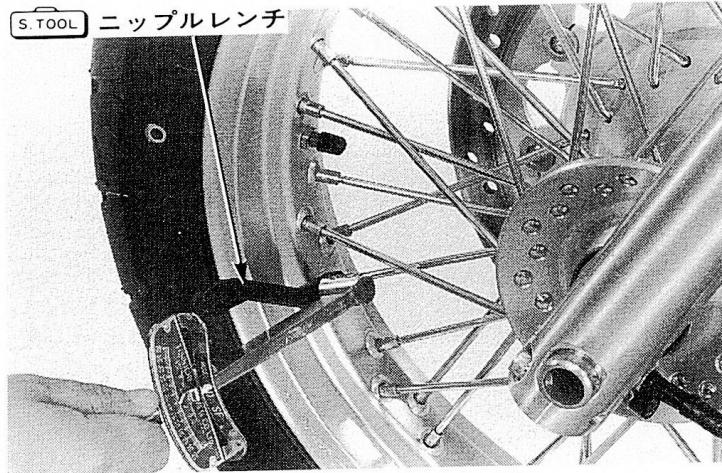
スポークをレンチなどで軽く叩いてゆるみを点検する。ゆるみのあるスポークはニップルレンチで均一に締め、リムの振れを点検する。

専用工具：

ニップルレンチ

07JMA-MR60100

トルク：4.2 N・m (0.42 kgf-m)



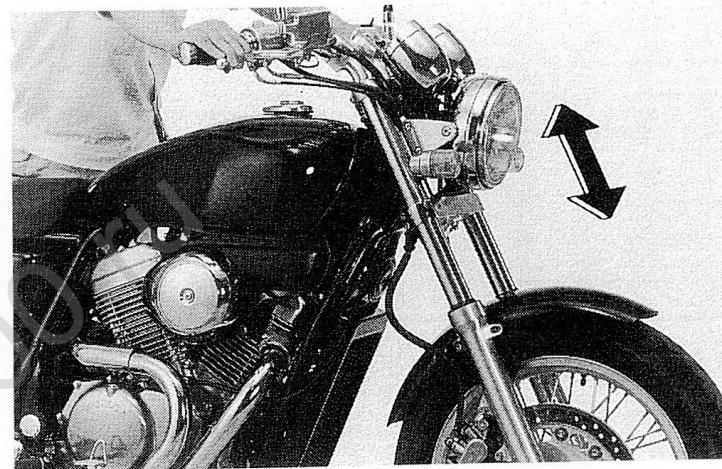
## サスペンション

### 作動の点検

スタンドを外し、フロントブレーキをかけてハンドルを押してフロントサスペンションを数回伸縮させる。

ガタや異音がある場合には、ステアリングシステムかフロントフォークのガタかを確認する。

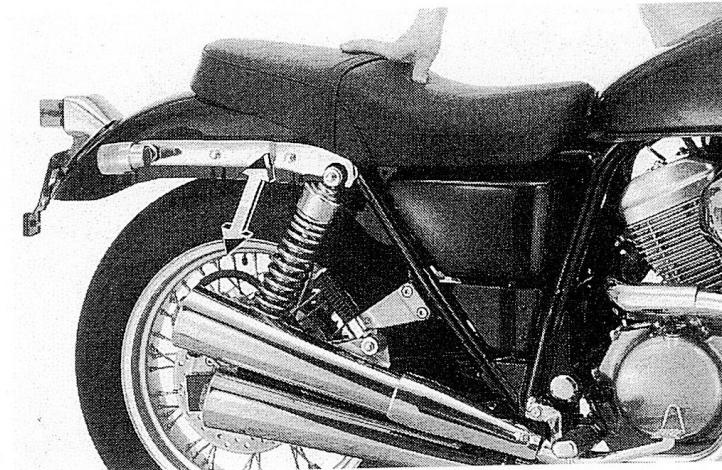
また、フロントフォークオイルシールからのオイル漏れやフォークチューブの摺動面に損傷がないかも点検する。



スタンドを外し、車体後部を下へ押してリヤサスペンションを数回伸縮させる。

ガタや異音がある場合には、スイングアームピボットカリヤショックアブソーバ取り付け部のガタか確認する。

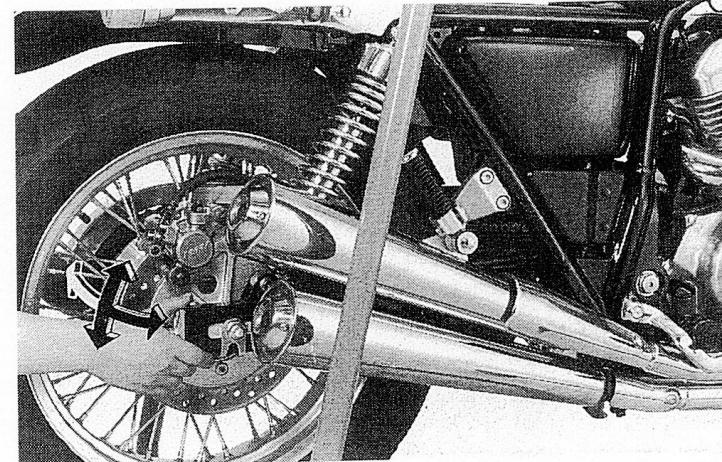
また、リヤショックアブソーバからのオイル漏れや損傷がないかも点検する。



### 連結部のガタ

リヤホイールを浮かした状態で、スイングアームを上下左右に揺すってガタがないか点検する。

異常なガタがある場合はスイングアームピボットボルトにゆるみがないか、ピボットペアリングに摩耗、損傷がないか点検する。



## クラッチ

### クラッチの遊び

クラッチレバー先端でクラッチレバーの遊びを点検する。

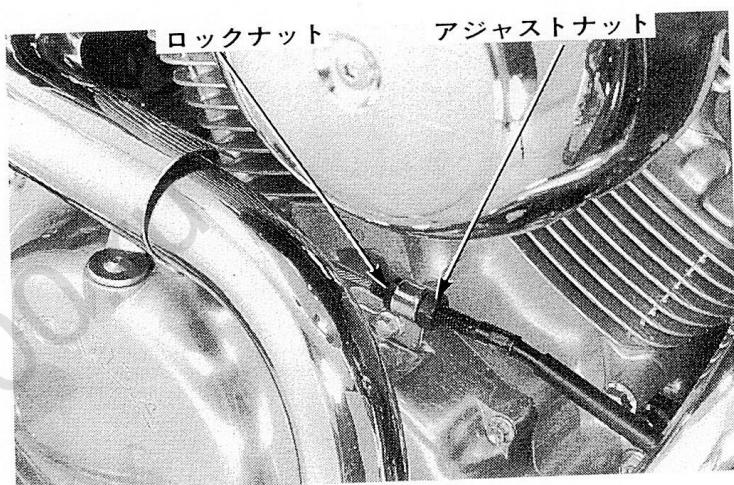
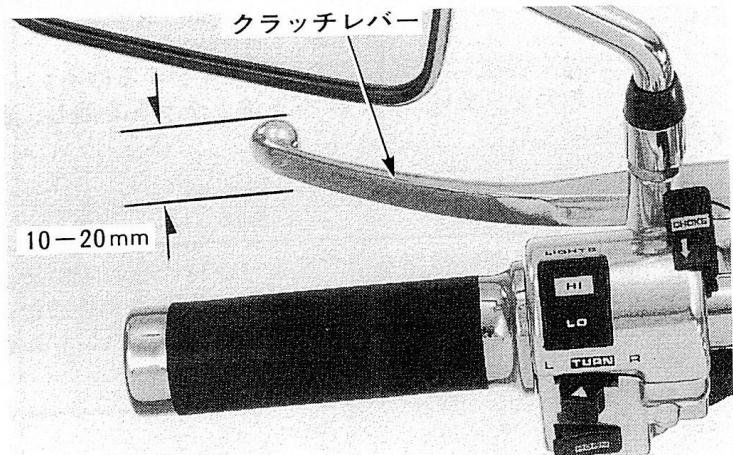
遊び：10—20 mm

主調整はクラッチアーム側で行う。ロックナットをゆるめ、アジャストナットを回してレバーの遊びを調整する。

**\*注意**

上側アジャスタ（レバー側）を一杯にねじこんでから調整すれば次回の調整は上側アジャスタで容易に行える。

調整後、アジャストナットを固定し、ロックナットを締め付ける。

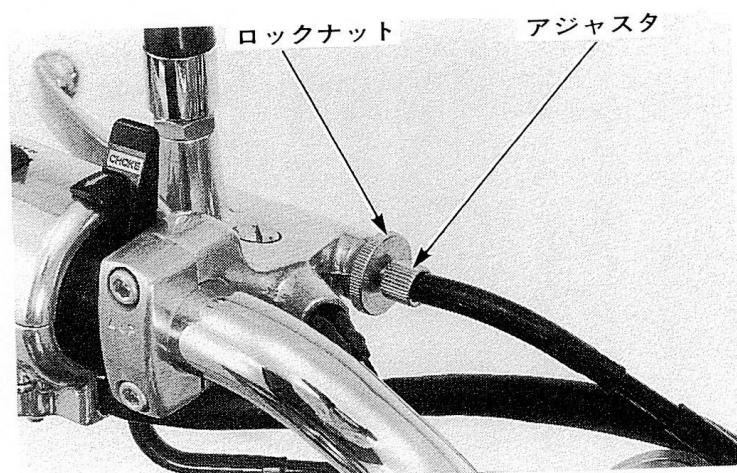


微調整はレバー側のロックナットをゆるめてアジャスタを回してレバーの遊びを調整する。

**\*注意**

アジャスタを戻し過ぎ、ねじ部の掛かり代が少ないまま使用するとねじが破損することがある。ねじ部が8 mm以上出る場合は、一旦アジャスタを一杯にねじ込み、クラッチアーム側で調整する。

遊びが基準値に調整できない、もしくは調整後にクラッチがすべる場合はクラッチの分解整備を行う。（⇒10章）



## ドライブチェーン

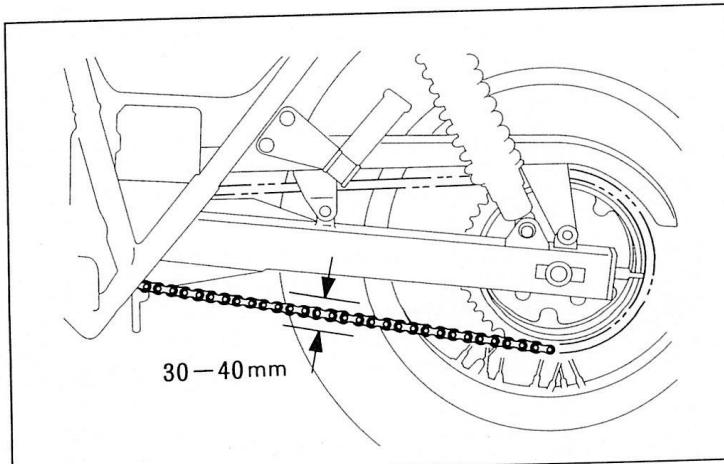
### チェーンの緩み

**\*注意**

ドライブチェーンが回転中は指を挟んだりする危険があるため点検、調整の際は必ずエンジンを停止すること。

車体をサイドスタンドで支える。  
スプロケット間下側の中間位置でドライブチェーンの遊びを点検する。

遊び：30—40 mm



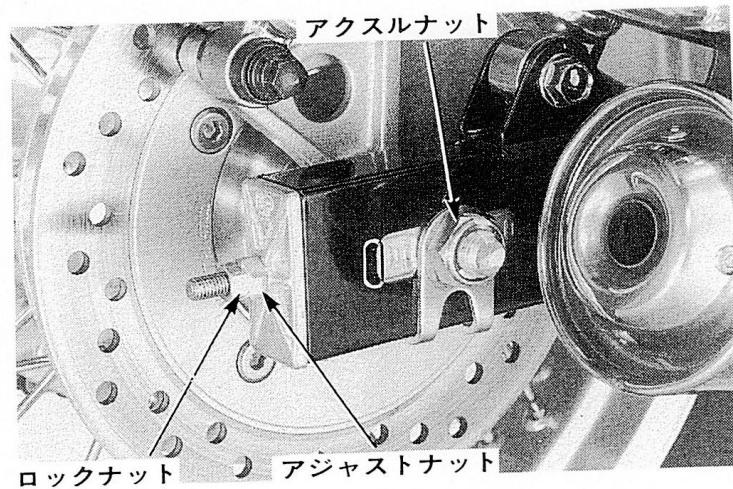
# 点検、調整

## ・調整

ホイールが動く程度にリヤアクスルナットをゆるめる。  
左右のロックナットをゆるめ、アジャストナットを回し、遊び  
を調整する。

### ▲注意

アジャスタには調整位置を示す目盛りが付けられている。  
このアジャスタの調整目盛りは左右同じ位置とすること。  
調整が不揃いな場合、ホイールの整列が狂い、ハンドルが  
とられことがある。

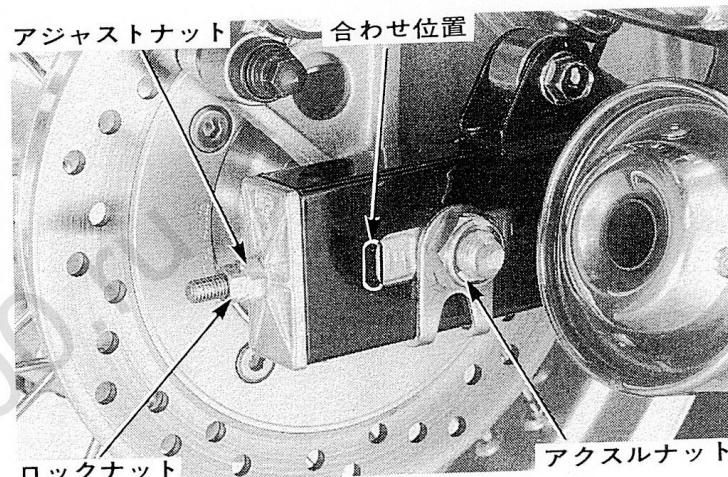


調整後、リヤアクスルナットを規定トルクで締め付ける。

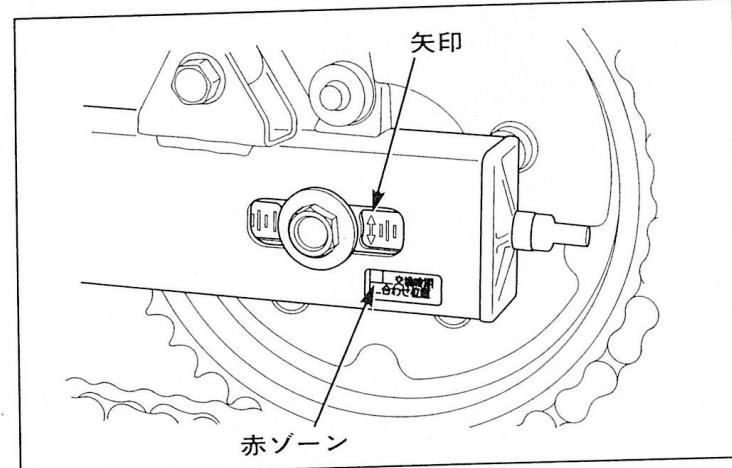
トルク：88 N·m (9.0 kgf-m)

チェーンの遊びを再点検する。  
アジャストナットを増し締めし、ロックナットを締め付ける。

トルク：21 N·m (2.1 kgf-m)



ドライブチェーンの調整後、アジャスタの合わせマークが  
チェーンインジケータラベルの赤ゾーン（交換時期）に入った  
らドライブチェーンを交換する。

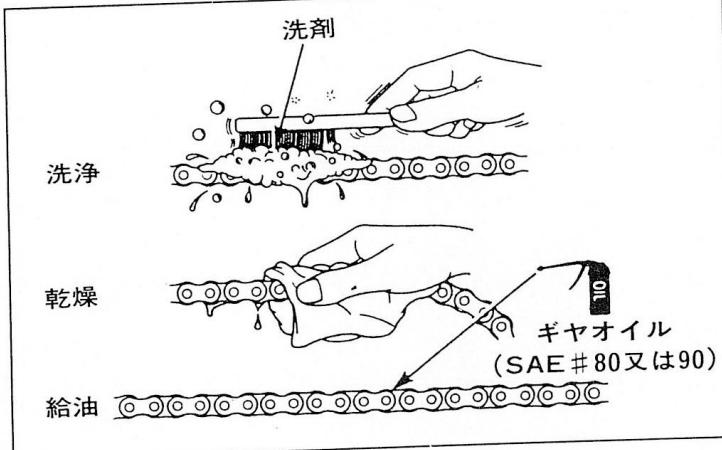


## ・清掃、給油、点検

洗剤などでチェーンの汚れを落とし、充分乾燥させ#80-90のギ  
ヤオイルを均等に塗布する。  
余分なオイルは拭き取る。

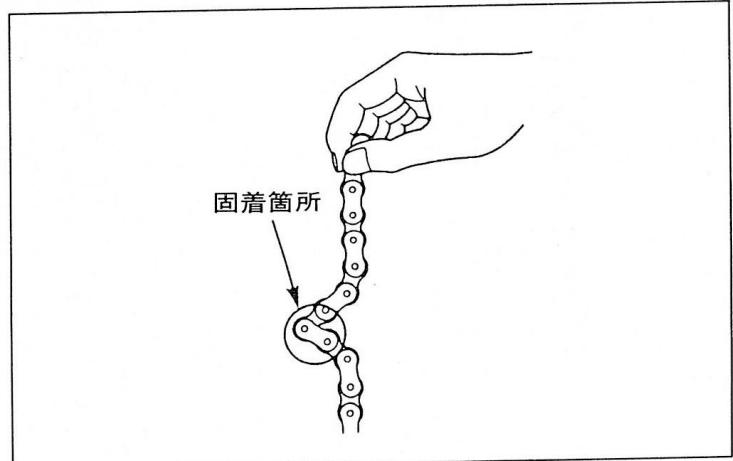
### \*注意

O-リング入りのドライブチェーンを使用しているため、清  
掃、給油の時は下記の作業を行わないこと。チェーンに封  
入されたO-リングの劣化やグリスの流出を招き、チェーン  
の寿命を縮めることになる。  
・スチームまたは高圧洗車機の使用  
・溶剤入りチェーンスプレーやガソリンの塗布



チェーンのリンクに固着箇所がないか点検する。固着の程度が軽い場合は洗油や灯油の中ではぐし、滑らかになったら、洗油、灯油を速やかに拭き取り充分に乾燥させる。

固着が直らずリンクの作動が滑らかでないものやリンク、ローラに損傷があるものは交換する。



## ドライブチェーンの交換

### △注意

- ・ドライブチェーンはマスタリンクジョイントピンかしめタイプを使用しているのでチェーンの交換は指定の専用工具、交換用チェーンを必ず用いること。
- ・クリップタイプチェーンは絶対に使用しないこと。

ドライブチェーンをゆるめる。

専用工具を組み立てる。

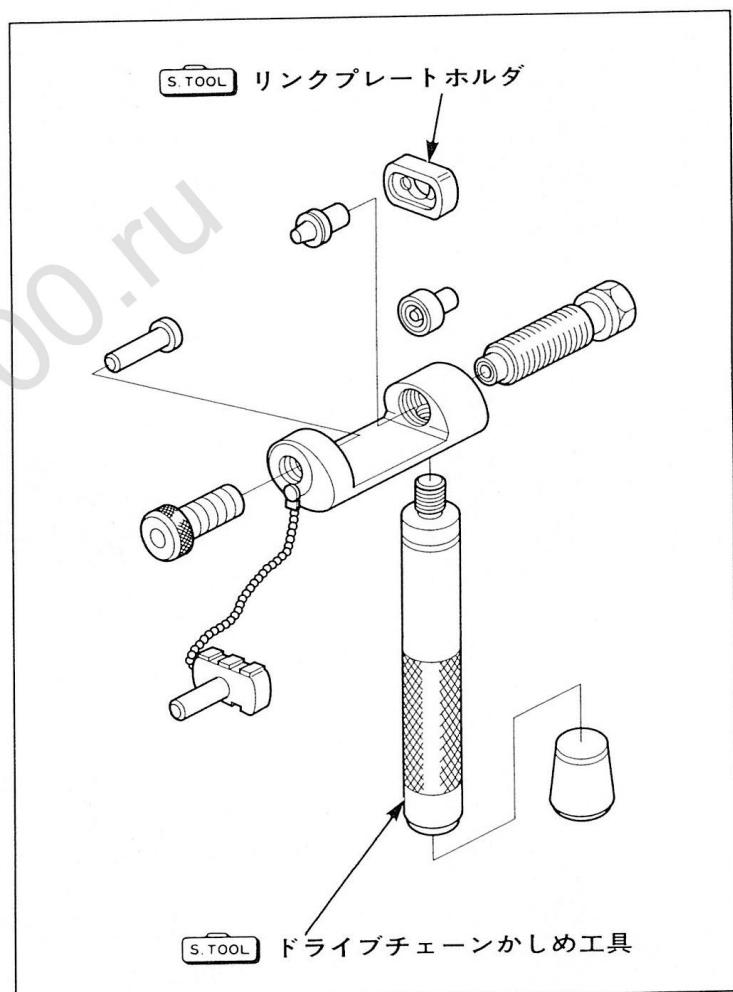
### 専用工具：

ドライブチェーンかしめ工具  
—リンクプレートホルダ

07HMH-MR10103  
07HMH-MR10130

### △注意

- ・かしめ工具使用に際しては取扱説明書を良く読んでから作業を行うこと。
- ・マスタリンク、O-リング、リンクプレートの再使用はしないこと。

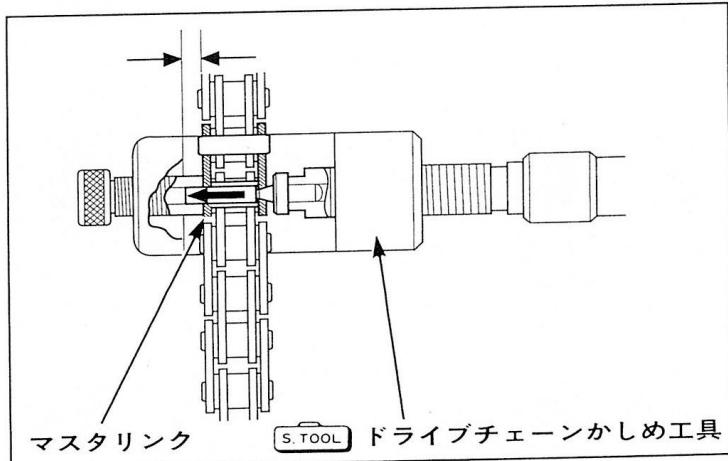


ドライブチェーンかしめ部に工具をセットし、かしめ部を切断する。

### 専用工具：

ドライブチェーンかしめ工具

07HMH-MR10103



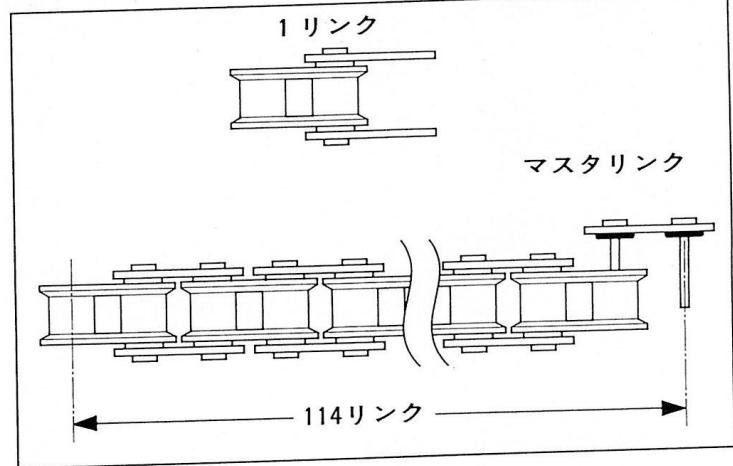
# 点検、調整

新品のチェーンの余分なリンクをドライブチェーンかしめ工具を使用して取り外し、規定のリンク数にする。

## 注意

ドライブチェーンのリンク数を数える場合はマスタリンクをリンク数に入れること。

指定交換用チェーン：RK：525SM5／114LE  
DID：525V8／114LE



リンク数を調整したドライブチェーンを取り付ける。

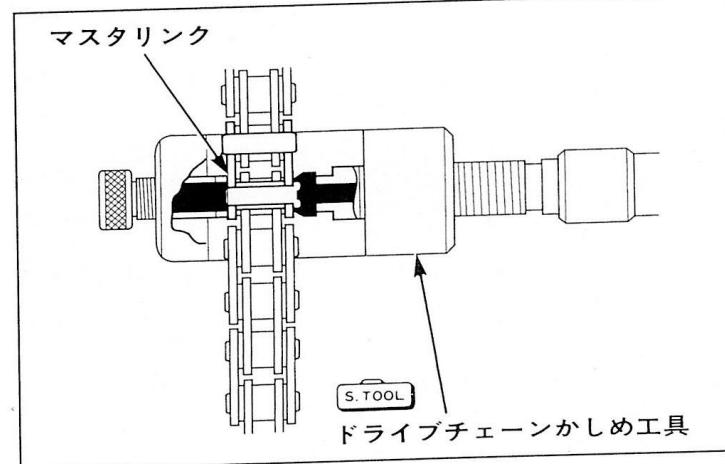
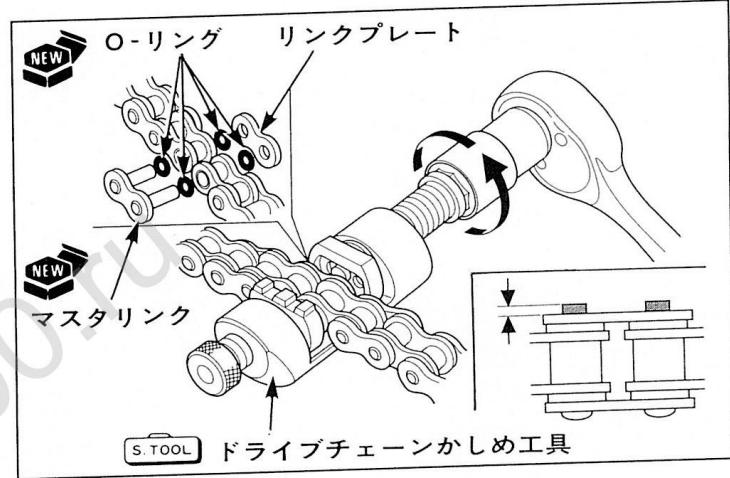
新品のマスタリンクにO-リングを取り付け、噛み込みのないようにチェーンの内側からマスタリンクを取り付ける。さらに、O-リング、リンクプレートを取り付け、リンクプレートからマスタリンクジョイントピン先端部までの長さ（イラスト参照）を点検する。

標準値：RK：1.2—1.4 mm  
DID：1.15—1.55 mm

## 注意

- マスタリンクプレートの刻印を外側に向けて取り付けること。
- O-リングに噛み込みのこと。

専用工具を使用してマスタリンクのジョイントピン先端をかしめる。

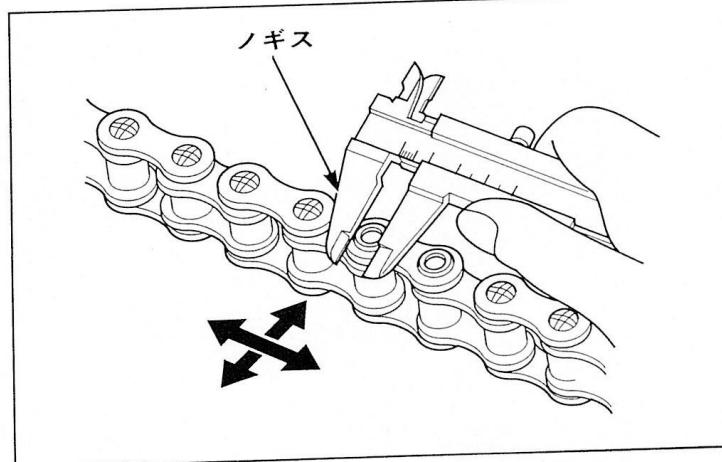


かしめ後、ノギスを使用してかしめ範囲を測定する。

かしめ範囲：5.5—5.8 mm

## 注意

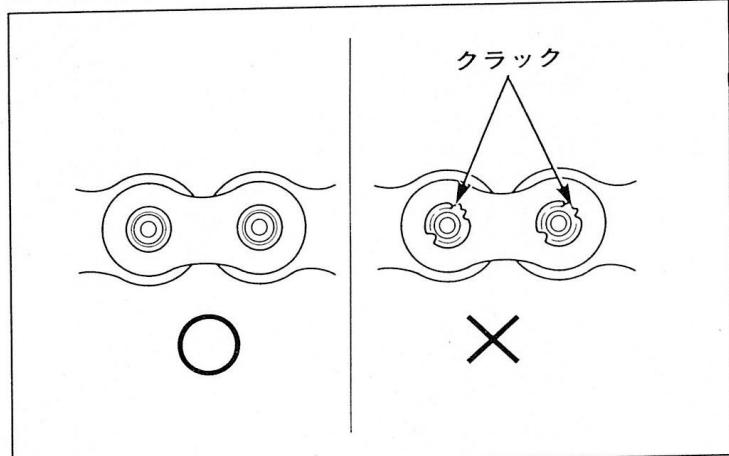
測定結果が不良の場合は新品のマスタリンク、リンクプレート、O-リングを使用して再度かしめ直す。



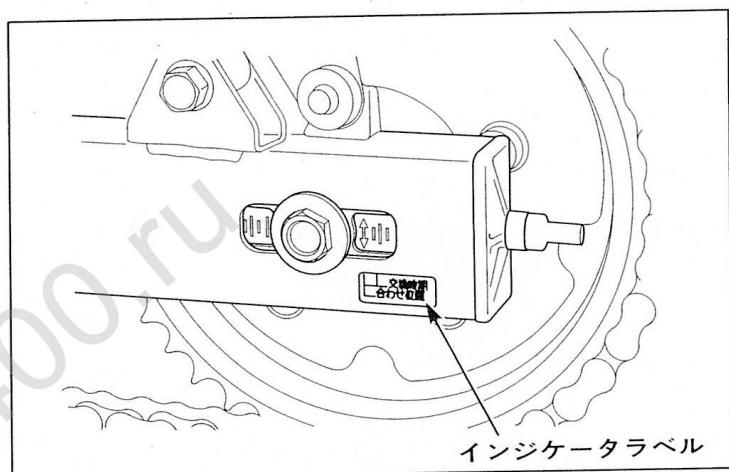
かしめ部にクラックが発生していないか点検する。  
クラックがある場合は、新品のマスタリンク、リンクプレート、O-リングを使用して再度かしめ直す。

## △注意

クリップタイプチェーンは絶対に使用しないこと。



ドライブチェーン交換後、ドライブチェーンの遊びを調整する。チェーンインジケータラベルのグリーンゾーンのはじめる。(赤ゾーンの反対) 側を合わせマークに合わせて貼り付ける。



## ドライブチェーンスライダの点検

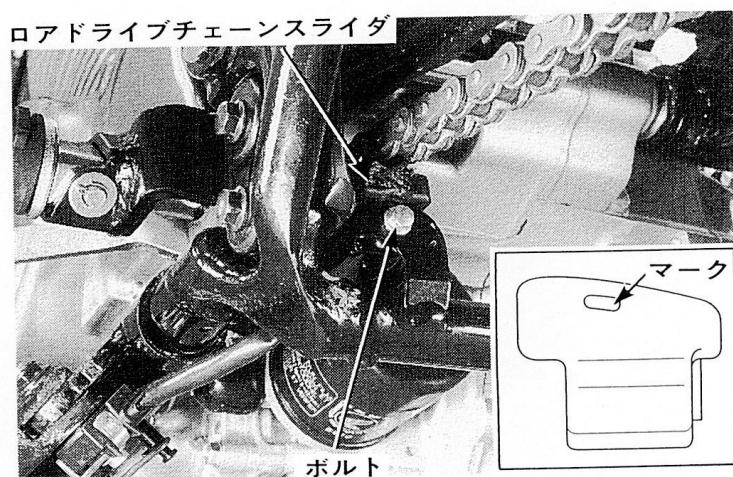
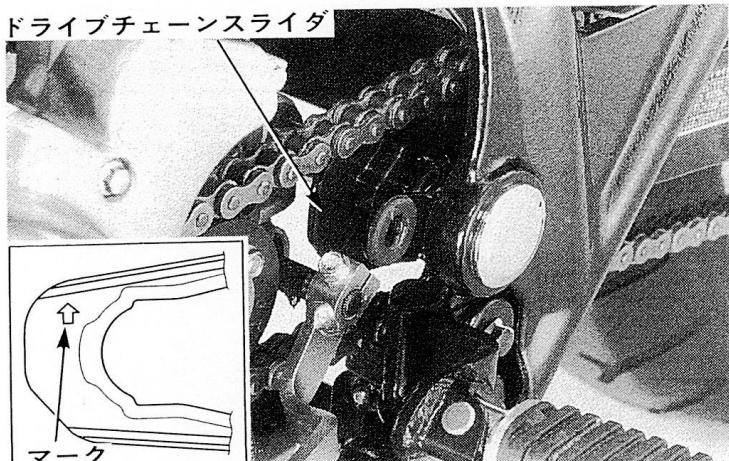
ドライブスプロケットカバーを取り外す。 (⇒7-3)  
ドライブチェーンスライダの摩耗、損傷を点検し、摩耗限界マークまで摩耗している場合は交換する。

## ★注意

ドライブチェーンとスイングアームが当たると、ドライブチェーン、スイングアームの損傷や摩耗の原因となるため早めに交換する。

## トルク：

スライダスクリュ：6 N·m (0.6 kgf-m)  
ロアスライダボルト：9 N·m (0.9 kgf-m)



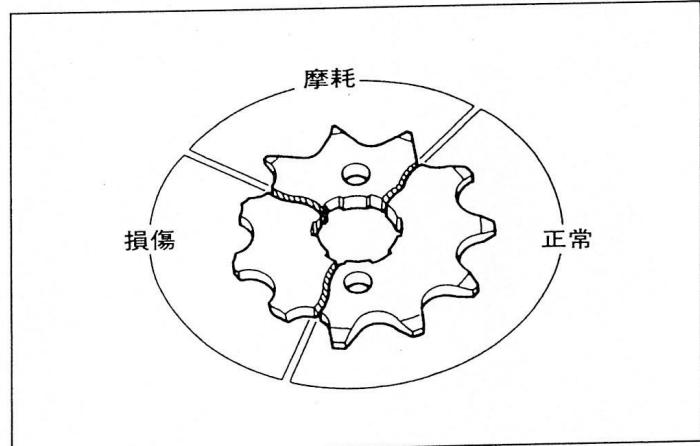
# 点検、調整

## スプロケットの取付状態及び摩耗

ドライブおよびドリブンスプロケットの摩耗、損傷を点検する。

### △注意

チェーンとスプロケットはセットで交換すること。伸びたチェーンを新品のスプロケット、またはその逆の組み合わせの使用は噛み合いピッチが合わなくなり、古い方の部品が早期に損傷することになる。



ドライブおよびドリブンスプロケット取り付けボルト、ナットのゆるみを点検し、ゆるみのあるものは増し締めをする。

## 電気装置

### 点火装置

#### スパークプラグの状態

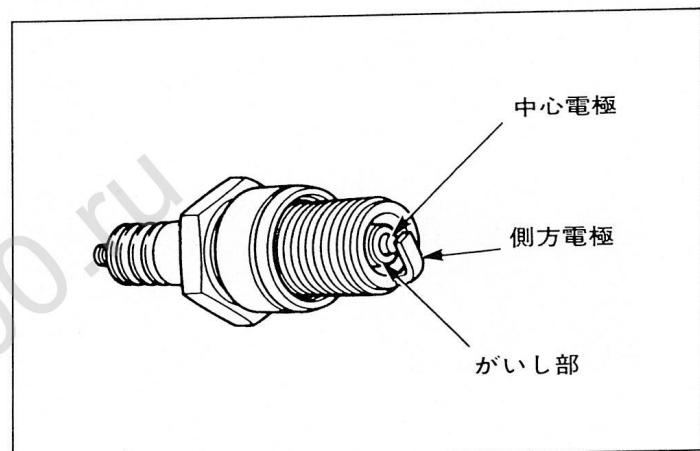
スパークプラグキャップを取り外す。

スパークプラグを外す際にゴミなどが燃焼室内に入らないようプラグの座面部分を圧縮空気などで清掃し、プラグを取り外す。

プラグの中心および側方電極の消耗、腐食、焼損、がいし部の損傷などを点検し、必要があれば交換する。

#### 指定プラグ：

標準	DPR7EA-9 (NGK) X22EPR-U9 (日本電装)
OP (オプション) 高速を主体とした走行時	DPR8EA-9 (NGK) X24EPR-U9 (日本電装)



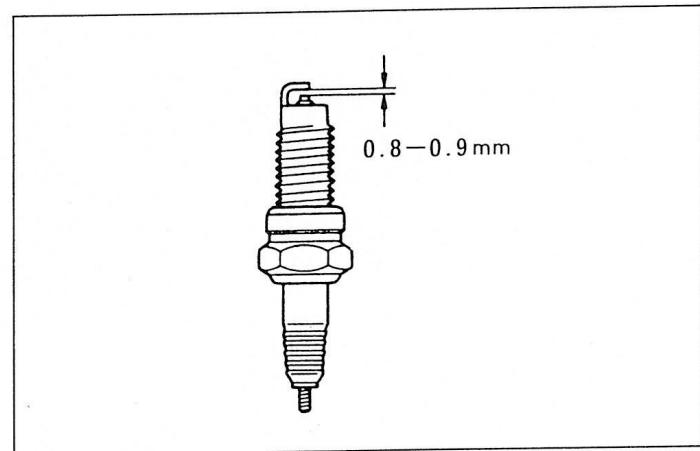
ワイヤブラシまたはプラグクリーナを使用してプラグの電極部の堆積物を清掃する。

ワイヤタイプのプラグゲージで中心電極と側方電極のすき間(プラグギャップ)の点検をし、規定値外のものは側方電極を曲げてギャップを調整する。

標準：0.8–0.9 mm

プラグをシリンダヘッドに取り付ける。

### \* 注意



シリンダヘッドのねじ山の損傷を防ぐため、プラグの取り付けはまず手でシリンダヘッドにねじ込んでからプラグレンチで締め付ける。

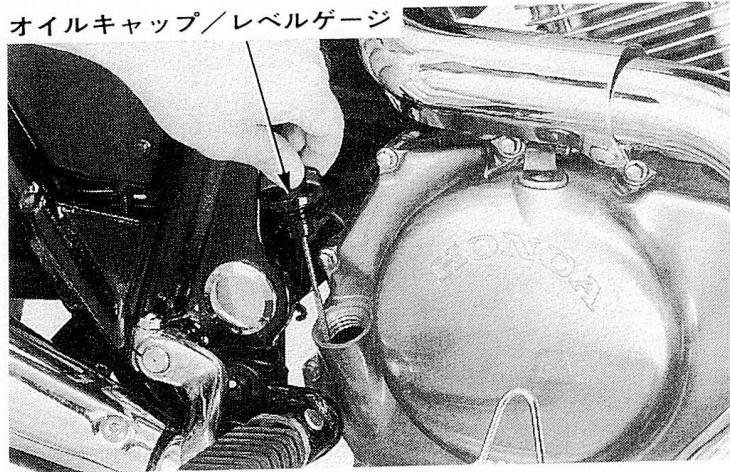
新品プラグの場合はシーリングワッシャが座面に当たってから約1/4回転締め込む。再使用するプラグは規定トルクで締め付ける。

トルク：14 N·m (1.4 kgf-m)

## 潤滑装置

### エンジンオイルの点検

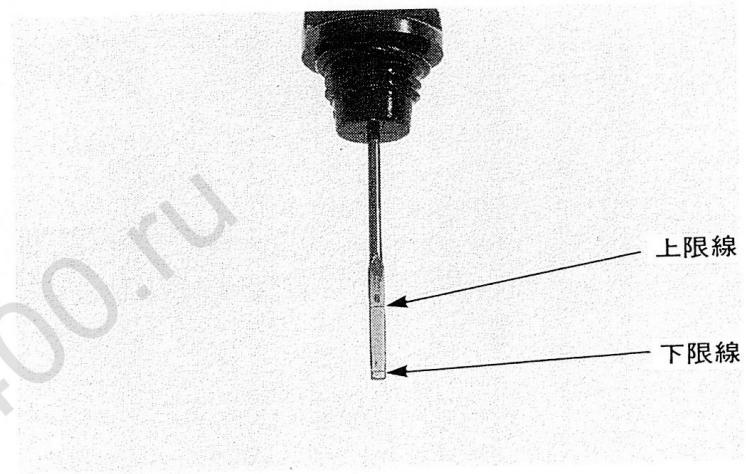
エンジンを暖機運転し、エンジンオイルを十分に暖める。エンジンを停止し、オイルフィラーキャップ／レベルゲージを外してゲージ部に付着したオイルを拭き取る。車体を水平な場所に置き、車体を垂直にする。エンジンを停止してから2-3分後に、車体を垂直に支えてオイルフィラーキャップ／レベルゲージをねじ込まずにゲージ取り付け口に差し込み、オイル量を測定する。



ゲージの上限線と下限線の間に油面があれば良好である。下限線近くまでオイル量が減っていたら、上限線まで推奨エンジンオイルを補給する。

#### 推奨エンジンオイル：

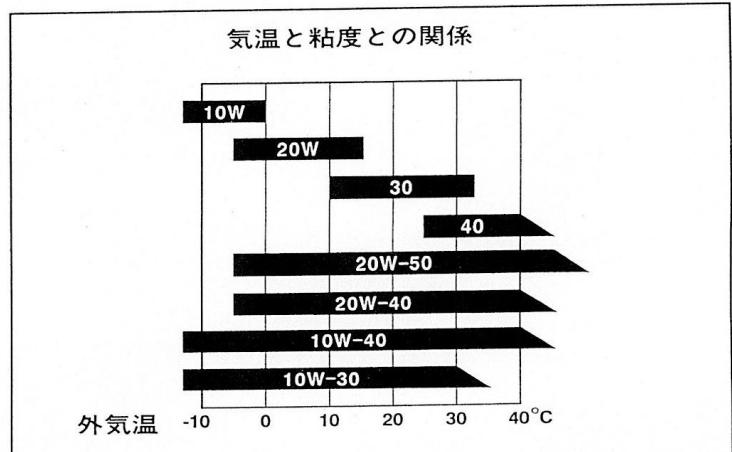
- ・ホンダ純正ウルトラU（4サイクル二輪車用）  
SAE 10W-30またはホンダ純正ウルトラGP（4サイクル二輪車用）SAE 10W-30、20W-50
- ・API分類SEまたはSF級のエンジンオイル



#### 注意

オイル粘度は右表に従い、使用する地域の外気温に適した粘度のオイルを使用すること。

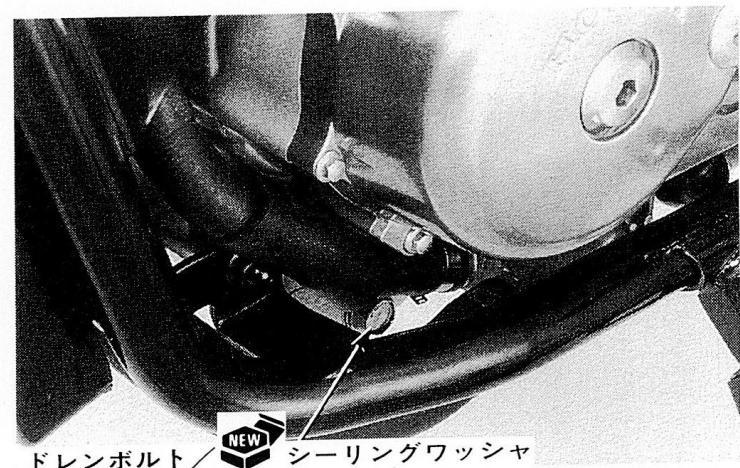
オイルフィラーキャップ／レベルゲージを確実に締め付ける。



### エンジンオイルの交換

サイドスタンドで車体を支える。エンジンを暖機運転し、エンジンオイルを十分に暖める。エンジンを停止し、オイルフィラーキャップ／レベルゲージを外す。クランクケース底部にあるオイルドレンボルトとシーリングワッシャを外し、オイルを排出する。オイルが完全に抜けてから洗浄したドレンボルトと新品のシーリングワッシャを取り付け、規定トルクで締め付ける。

トルク：34 N·m (3.5 kgf-m)



ゲージ取り付け口から推奨エンジンオイル ( $\Rightarrow$  3-15) を少しづつ注入する。

エンジンオイル容量 : 2.25 ℥ (オイル交換時)  
2.5 ℥ (オイルフィルタ交換時)  
2.8 ℥ (全容量)

レベルゲージで確認しながら、油面がゲージの上限線に達するまでオイルを注入する。

エンジンを始動し、エンジン各部にオイル漏れがないか点検する。

エンジンを停止し、オイル量を点検する。 ( $\Rightarrow$  3-15)

## オイルフィルタの交換

エンジンオイルを排出する。(上記参照)

オイルフィルタレンチを使用してオイルフィルタを取り外す。

専用工具 :

オイルフィルタレンチ

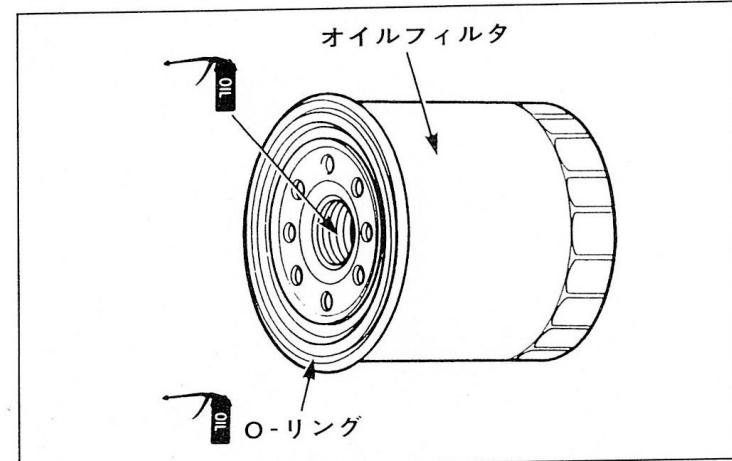
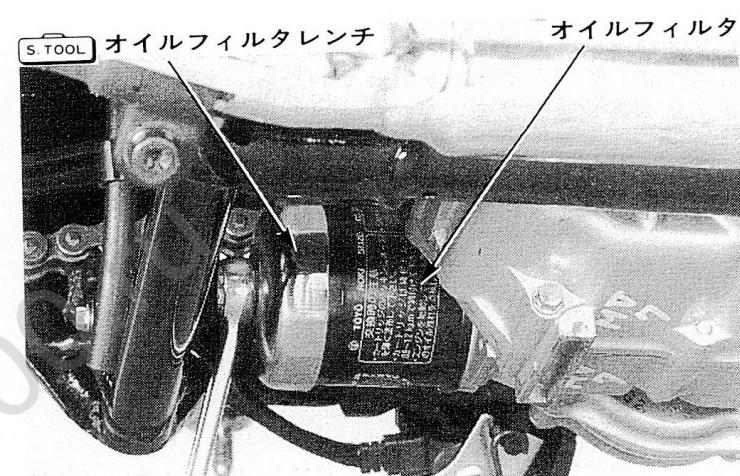
07HAA-PJ70100

エンジンのオイルフィルタ取り付け面をウエスで清掃する。  
新品のオイルフィルタのO-リングとねじ部にエンジンオイルを塗布し、フィルタをエンジンに取り付ける。  
フィルタレンチでオイルフィルタを締め付ける。

トルク : 10 N·m (1.0 kgf-m)

エンジンオイルを注入する。(上記参照)

エンジンを始動し、オイル漏れとオイル量を点検する。

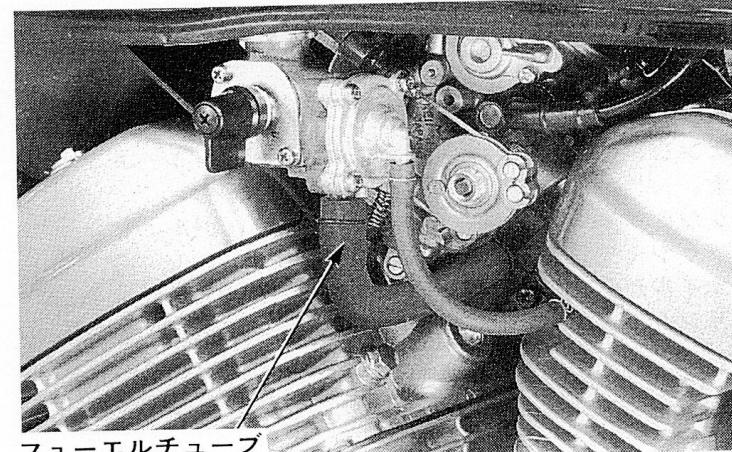


## 燃料装置

### 燃料系統の状態

フューエルコックからキャブレータまでのフューエルチューブを点検する。

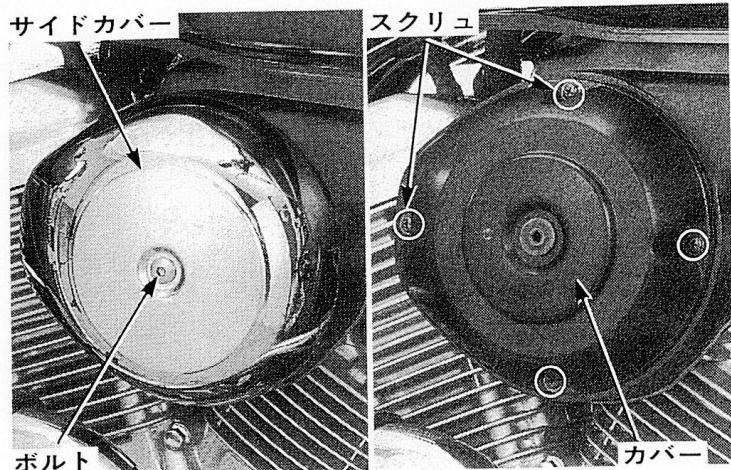
フューエルチューブに劣化や損傷がある場合は新品に交換する。



## エアクリーナエレメントの交換

この車のエアクリーナエレメントはビスカス式を採用しているため清掃はできない。3-1頁で指定された走行距離に応じて交換すること。

ボルト、スクリュを取り外し、エアクリーナケースサイドカバー、エアクリーナケースカバーを取り外す。

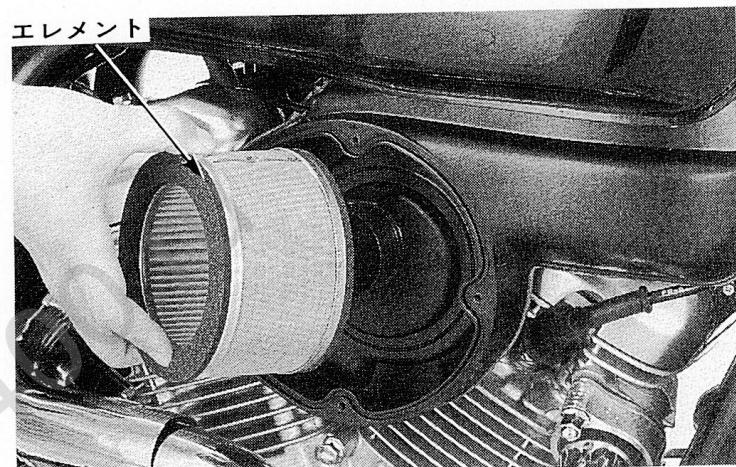


エアクリーナエレメントを取り外す。

取り付けは、取り外しの逆手順で行う。

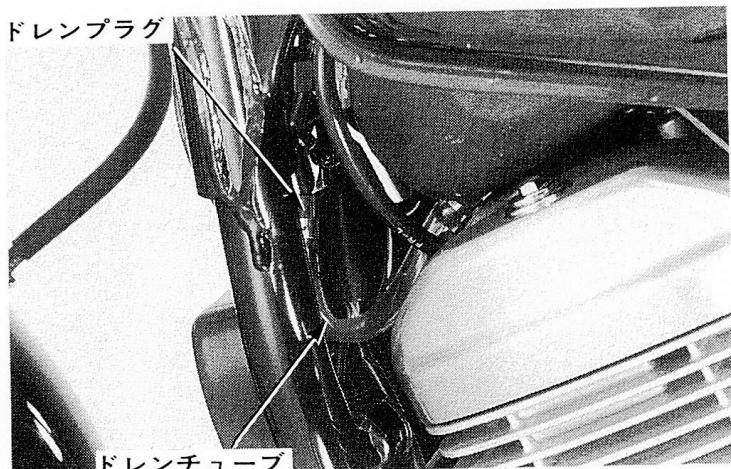
### \*注意

エアクリーナエレメントを取り付け前にエアクリーナーケース内にゴミ等がないことを確認し、ある場合は取り除いてからエレメント、ケースカバーを取り付けること。



## クランクケースブリーザの清掃

エアクリーナーケースドレンチューブの透明部分に堆積物が見えている場合はドレンプラグを外し、ドレンチューブに溜まった水分、油分を排出する。

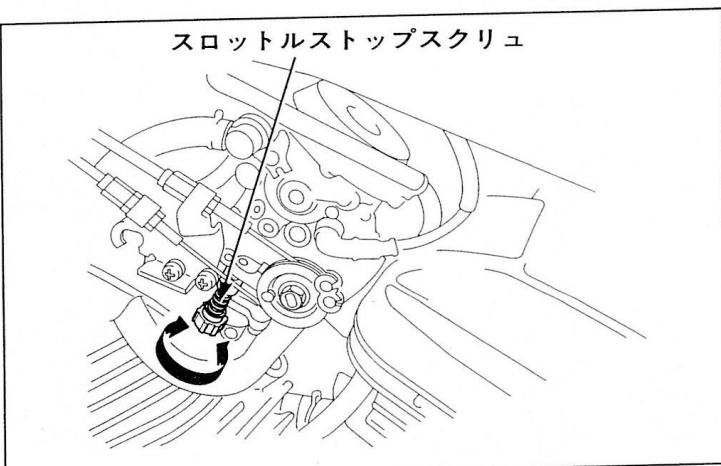


## アイドリング調整

エンジンを始動し暖機運転を行う。  
車体が傾いているとアイドリング回転数が変化することがあるため、平らな床面で車体を垂直に支える。  
エンジンが十分に暖まった状態で、アイドリング回転数を確認する。

アイドリング回転数： $1,100 \pm 100 \text{ rpm}$

調整は、キャブレータのスロットルストップスクリュを回して行う。



## アイドリング状態の確認：

アイドリング中に軽いスナッピングを数回繰り返し、回転の上がり具合、回転の下がり具合について確認する。また、スナッピングした後で、アイドリング回転数に変化がないことを確認する。

アイドリング中にハンドルを左右一杯に切って、アイドリング回転数の変化がないことを確認する。もし、ハンドル操作でアイドリング回転数が変化する場合、スロットルグリップの遊び、スロットルケーブルが正しく通されているか点検する。



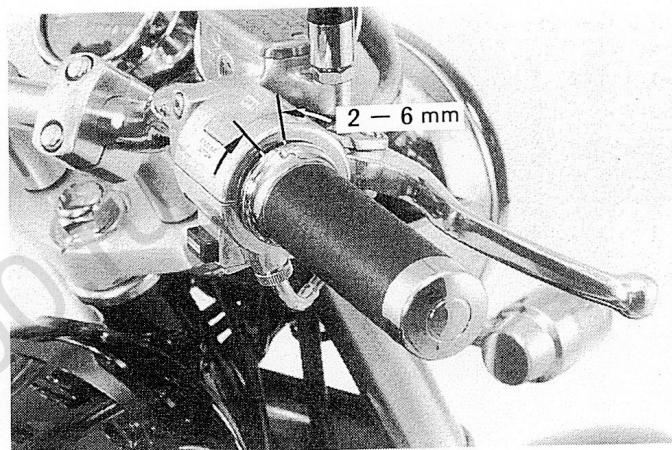
## スロットルグリップの点検

スロットルグリップを操作し、滑らかに作動するか点検する。滑らかに操作できない場合は、スロットルケーブルの損傷またはインナーケーブルの錆、スロットルグリップの固着がないか各々確認する。

スロットルグリップのフランジ外周部で遊びを点検する。

遊び：2–6 mm

遊びが規定範囲にない場合、遊びの調整を行う。



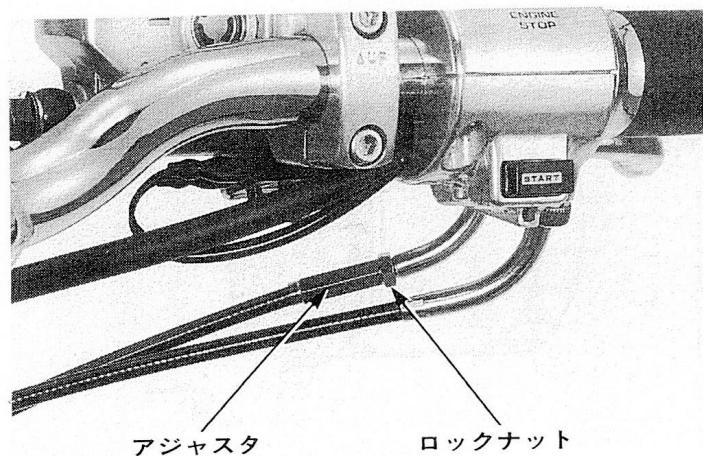
## スロットルグリップの遊び調整

遊びの調整はスロットルケーブルの両端で行うことができる。

微調整はスロットルグリップ側のアジャスタで行う。

ロックナットをゆるめ、アジャスタを回して遊びを調整する。

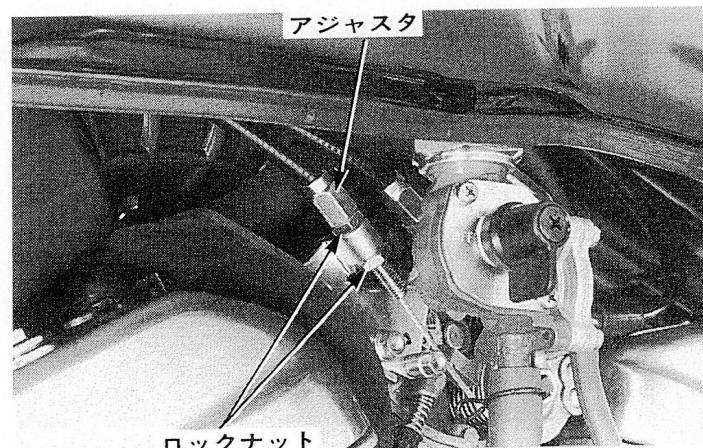
調整後、ロックナットを締め付ける。



主な調整はキャブレータ側で行う。

引き側ケーブルのロックナットをゆるめ、アジャスタを回して遊びを調整する。

調整後、ロックナットを締め付ける。



## 冷却装置

### 冷却水の量

**⚠ 注意**

- 液量点検はリザーブタンク側で行う。ラジエータ側で行わないこと。エンジンが熱い時（100°C以上あると思われる時）にラジエータキャップを開けると冷却系統の圧力が低下し、急激に冷却液が沸騰することがある。冷却液の温度が下がってからキャップを開けること。
- 冷却液は毒性があるため飲用したり、皮膚、目や衣服に付着させないこと。  
- 皮膚や衣服に付着した場合は、石鹼で洗い落とす。  
- 目に入った場合は水で充分に洗い流し、専門医の診察を受ける。  
- 飲んだ場合は直ちにおう吐させ、専門医の治療を受ける。
- 冷却液は子供の手の届かない場所に保管する。

R.サイドカバーを取り外す。（⇒2-2）

エンジンを始動し暖機運転を行う。

エンジンを停止し、平らな床面で車体を垂直に支える。

リザーブタンクの液面がタンクの上限線（UPPER）と下限線（LOWER）の間にあるか点検する。

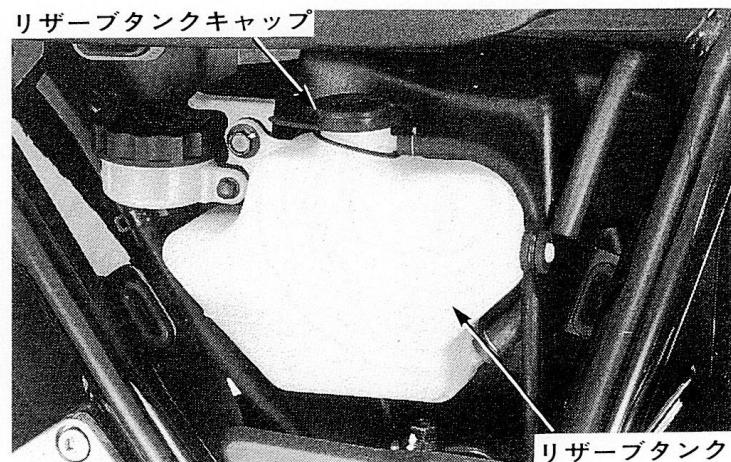
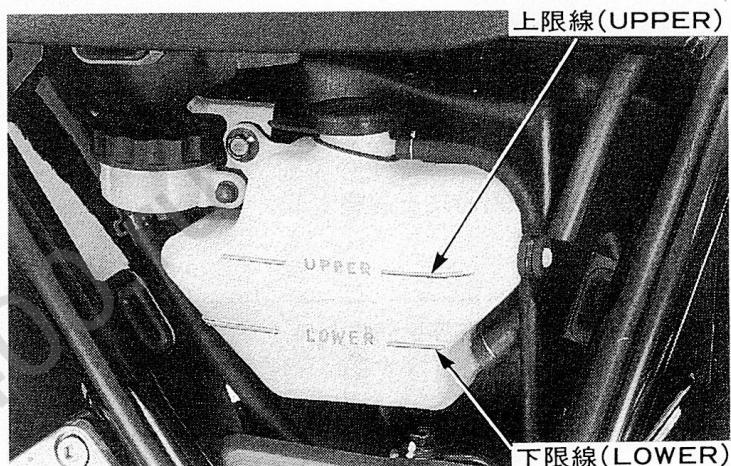
液面が下限線以下の場合には、リザーブタンクキャップを外し、冷却液（補充液または原液を薄めて作る）を上限線まで補充する。

推奨冷却液：ホンダ純正ウルトララジエータ液（補充液）またはホンダ純正ウルトララジエータ液（原液）

標準濃度：30%（混合比により冷却液の凍結温度が変化する。車を使用する地域の最低気温にみあった混合比に調整する。（⇒5-4）

**⚠ 注意**

冷却液は防錆、不凍の機能を持っている。水道水などの使用はエンジン内に錆が発生したり、寒冷時に凍結してエンジンが破損する場合があるため必ず冷却液を使用すること。



### クーラントの漏れ

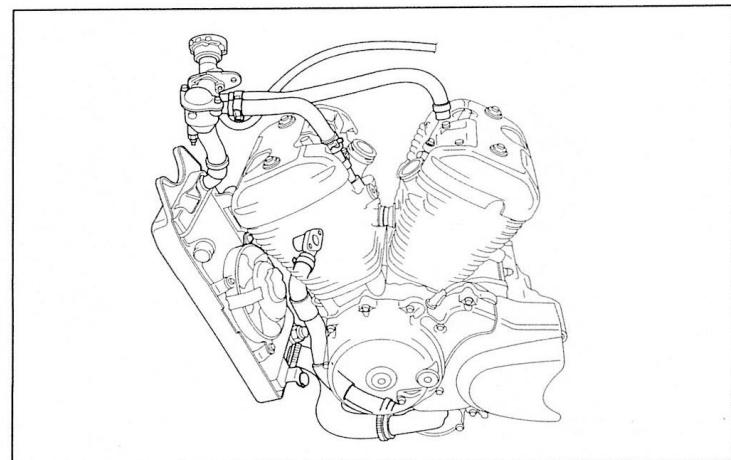
フューエルタンクを取り外す。（⇒2-5）

ラジエータホース、ウォータポンプ、ウォータホースや各接続部から冷却液が漏れていないか点検する。

水漏れがある場合は分解整備を行う。（⇒5章）

ラジエータホース、ウォータホースの劣化、損傷を点検する。

ゴムホースは熱や経年変化などにより自然劣化を起こし、劣化が進行すると冷却系統に圧力が加わった時にホースが破裂することがある。ホースを指でつまんで、大きなひび割れがないか点検する。



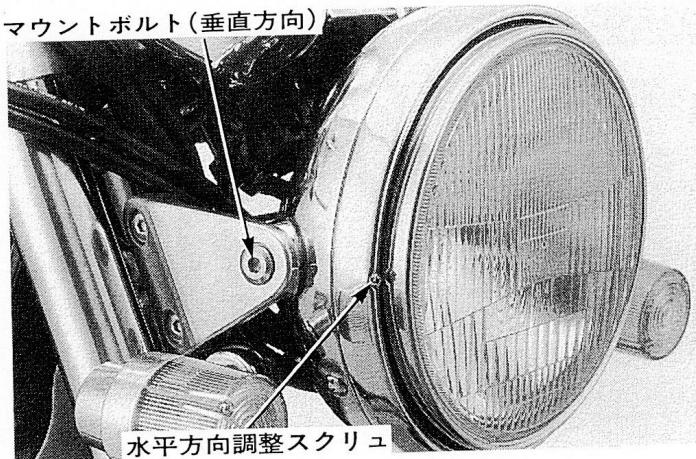
## 灯火装置

### ヘッドライトの光軸調整

垂直方向の調整は、ヘッドライトマウントボルトをゆるめ、ヘッドライトを上下に動かしてブラケットとケースのポンチマークを合わせる。

ヘッドライトリムの水平方向調整スクリュを回して水平方向の調整を行う。

マウントボルト(垂直方向)



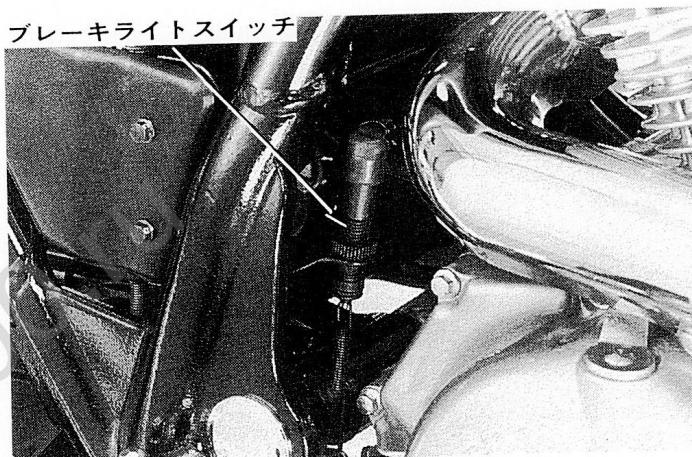
### リヤブレーキライト点灯時期の調整

リヤブレーキペダルを操作し、ブレーキが効く少し前にブレーキライトが点灯するか確認し、不具合のあるものは調整する。リヤブレーキライトスイッチの調整はスイッチのアジャストナットを回し、点灯時期を調整する。

#### △注意

調整時にスイッチ本体を回すとスイッチの内部で断線することがある。必ずスイッチ本体を押さえ、ナットを回すこと。

ブレーキライトスイッチ



調整後、点灯時期を確認する。

## その他

### シャシー各部の給油脂状態

車体各部の可動部を動かして、給油脂状態を確認する。作動が滑らかでない場合には、摺動部分に推奨グリスまたはオイルを塗布する。

